

■□■

身を焦がすような灼熱の夏が過ぎ去り、豊穣の季節に移り変わっていく中、秋晴れの涼やかな風がトマト畑の上を通り抜けていく。

降り注ぐ太陽の日差しも和らぎ、過ごしやすい気候を迎えようとも、日々の習慣が変動しない者もいた。

爽やかな朝の日差しや小鳥達の囀りが、どれだけ窓の外から呼びかけても、カーテンで遮断されてしまえば、効果も半減されてしまう。

薄暗い室内でベッドに横たわっているスペインにも、それは子守唄の変わり程度にしかなかった。

平穏な日常に浸るように、幸せそうな顔で寝息を立てていたスペインだったが、それを破壊しようとする人影もあった。

無遠慮に屋敷の門を潜り抜け、使用人達を適当にあしらいながら、一直線に寝室に向かっていたフランスは、少しだけ乱雑に扉を開け放っていく。

そして、予想と違わない姿を見た途端、思わず苦い溜め息

を零してしまった。

呑気に惰眠を貪っているスペインを前に、普段ならば悪戯してやるかと試みるころだが、今日ばかりは時間が惜しい。

足早に窓際まで歩み寄ったフランスが、一息でカーテンを押し広げた途端、眩しい日差しが容赦なく室内に降りそそぐ。

突然明るくなり、反射的に顔を歪めたスペインだったが、この程度の事で起きるわけもなかった。

睡眠の邪魔をする日差しを追い払うように、強く目を瞑ったスペインは、窓を背にしながら、鬱陶しそうに寝返っただけだった。

朝日に浮き彫りにされたスペインは、ズボン履いているものの、上半身は何も身につけておらず、腰から足にかけて絡みつくようにタオルケットが引っかかっている姿は、妖美にさえ感じる色気を醸し出している。

上下運動を規則正しく繰り返し続ける薄い胸板が、朝日の照り返しを受け、艶かしく浮かび上がり、瞬く間にフランスの口元が緩んだ。

「淫らだね、お兄さん吸い込まれちゃいそう」

押し倒したい衝動に誘われるまま、ゆつくりと顔を寄せていくフランスだったが、寸前のところで手に持っていた物がベッドの枠に引つかかり、動きを防がれてしまった。

忌々しく思いつつも持参してきた物に当たるわけにもいかず、軽く舌打ちしたフランスは、ゆつくりと顔を離すと、八つ当たりするように平和に満ちた寝顔へ、ガーマントバッグを叩きつけた。

「そろそろ起きてほしいな〜」

「う〜」

穏やかなのは口調だけだったフランスから、唐突な衝撃を加えられ、小さな呻きと共に身動きしたスペインは、少しだけ目が覚めたものの、すぐに状況が分かるわけもなく、混濁する思考を持て余すばかりだった。

しかし、突然襲ってきた物が危険物でない事を確認出来た途端、それを軽く手で押しやったスペインは、そのまま反対側に寝返りを打ってしまった。

「もお〜ちよい、寝かしてえ…なあ…」

寝言に近い口ぶりで呟いたスペインは、語尾には寝息と区別付かないものに変わり果てていく。

ろくに相手を視界に入れもせず、再び寝入ってしまったなど、昔では考えられない程の平和すぎる光景に、小さく笑ってしまったフランスだったが、このまま放置したままでは時間だけが過ぎるのも熟知している。

再び夢の中へ戻ろうとするスペインの腕を、無造作に掴み上げたフランスは、そのまま力ずくで引っ張り起こした。

「いいから起きろって」

強引に引き起こされ、寝ぼけ眼のまま視線を泳がしたスペインは、ようやく見下ろしてくる人物に目を向けていく。

「なんや、フランスかいな…朝っぱらから、何やのお〜」

欠伸を混じりで面倒くさそうに呟いたスペインは、朝日の逆光になっているフランスを眩しそうに目を細めたが、溜め息で返されてしまった。

まだ覚束ない思考を彷徨わせていたスペインは、指の先に触れた物に気付くと、緩々と視線を向けていく。

それは、先程叩きつけられたガーマントバッグだった。

何度目かの欠伸を零してから、それを拾い上げたスペインは、黒い物体を眺め始めたが、疑問符が付いたままの頭を傾けるばかりだった。

微妙な沈黙が流れていく中、ようやく働き出した思考の狭間で何かに思い当たったスペインは、ボンツと軽く自分の手の平を打つと、気急げな調子で口を開いていく。

「今日やつけ？」

「ちなみに、出発まで一時間もなかつたりするんだよね〜」
悠然とした口ぶりからは、少しも慌てていないように聞こえてしまい、寝起きではすぐに反応出来なかつたスペインは、欠伸混じりの呑気な返答を向けていく。

「そ〜なあ〜ん？」

しかし、何か引つかかつたような気がし、もう一度フランスの台詞を反芻した途端、急速に頭が冷めていくのが分かつた。目を大きく見開いたスペインは、慌てて時計を睨み付けると、無常にも時を正確に指し示しており、予定していた起床時間をとくに過ぎている事を思い知らされた。

「何でもっと早よ起こせへんねんっ〜」

寝坊したのは自分なのにも関わらず、文句を投げつけたスペインは、フランスが持参してきたゲームメントバッグを慌しく開けると、中からスーツやシャツを引っ張り出し始めた。

「まさかホントに、こんな時間まで寝てるとは思わないだ

ろっ？」

「ウソやーそれ絶対にウソやっ〜」

軽い笑い声を浮かべながら、嫌味つたらしく言い放つフランスに歯向かいつつも、急いで服を着替えたスペインは、ネクタイと上着を小脇に抱えると、そのまま部屋から飛び出していく勢いだった。

世話が焼けると思いつつも後ろに続いたフランスは、寝室から出る寸前、もう一度だけ時計を確認すると小さく微笑んでいた。

乱雑な足音を立てながら廊下を突っ切っていくスペインの背後を、少しだけ足早に歩いていたフランスは、大仰に肩を竦めると、わざとらしい溜め息を吐き出す。

「お前が2回も連チャンで会議ブツチするから、お兄さんが怒られたんだぞ〜」

「しゃ〜ないやろートマトの収穫で忙しかったねんっ〜」

何だかんだと罵り合いつつもキッチンまで辿りついた時、そこで優雅にコーヒーを飲んでいたもう一人の客人が、否応なく視界に入ってくる。

「よおー！」

当然と言いたげな顔で片手を上げた客人に、一瞬だけ時を止めたスペインだったが、次の瞬間には何もなかったように顔を背けると、そのまま玄関に向かつて歩き始めた。それに倣うように踵を返したフランスは、愚痴にも近い口調を続けていく。

「今日くらい引つ張っていかないよ、またイギリスの野郎に嫌味言われるからな」

「せやから、行くつてー」

まるで視界にさえ入らなかつたように扱われた客人は、慌ててコーヒーカップを置くと、後ろから追いかけてくる。

「オイー置いてくになう〜」

半ば悲壮な声で叫ばれ、緩慢な笑みで返したスペインと、面倒そうに振り返つたフランスは、口々にわざとらしい口調を放つていく。

「おつたん？ 気付かんかつたわ〜」

「お兄さんも、すっかり忘れてたよ」

口を揃えて無残に扱われ、苛立ちしか起こらないプロイセンは、理不尽な心情を怒声に変え始めた。

「待つててやつたんだぞー！ つつか、フランス、てめえ〜！ 一緒

に来たじゃね〜かつ」

猛然と喚き続けるプロイセンを前に、それでも緩慢な笑みを崩さなかつたスペインとフランスは、更に煽るように淡々と言葉を重ねていく。

「え〜、別に待つてんでもええねんで〜」

「そつそつ、待つててねとは、お兄さんも待つてないし〜」

プロイセンに構うあまり、すっかり足を止めてしまったスペインを、ちようどいいと言いたげだつたフランスは、さり気なく腰に手を回していく。

しかし、不感症の毛があるスペインが気付くはずもなく、怒りの方が勝っているプロイセンも、それどころではないと言いたげに唸り続ける。

「てめ〜ら〜」

怒りのあまり、小刻みに震え始めたプロイセンに、悪戯つ子のように目を輝かせたスペインとフランスは、大声で笑いながら身を反転させると、玄関口へ駆け出していく。

必死に追いかけてくるプロイセンから逃げるように、外に飛び出したスペインは、玄関先に堂々と鎮座しているチャーター機に、瞠目してしまった。

「いつの間にな…」

「お前のとこと、あのバカのとこで乗り継げは間に合う予定」

得意げに笑いながら、自家用機に乗り込んでいくフランスに、呆気にとられかけたスペインだったが、後ろからすごい形相で追いかけてくるプロイセンに気圧されるように乗り込んだ。

騒々しく喚き立てるプロイセンを適当に宥めたり、からかったりしている間にも、航路は真つ直ぐに開催国に向かって飛んでいく。

プロイセンのチャーター機に乗り換えた頃、ようやく双方の服に気付いたスペインは、自分も似たようなスーツを身に纏っている事に今更ながら気付いた。

急いでいた事もあり、深く考えずに渡されたものをそのまま着たが、一見には揃いのように見えるスーツに、小首をかしげるばかりだった。

シャツの裾口を軽く引つ張りながら顔を上げたスペインは、

目の前で生暖かい目を宿していたフランスに視線を向けた。

「な〜コレって？」

「気付いた？これ、お兄さんとの新作よ」

フランスが持参してきたのだから、そんな事は端から分かっていたが、わざと揃えたように着ている意味は分からない。

「それは分かるんやけど、なんで俺らまで着てんの？」

意味が分からないと言いたげなスペインの口調は、嫌味が含まれているわけでもなく、素朴な疑問に近かった。

それを、小さく笑ったフランスは、まるで歌でも歌うように、軽く囁いていった。

「たまにはいいだろ？」

黒を基調にされたスーツは、一見マフィアのようにも見え、が、わざわざ各自のイメージに合わせたのかと思える程、似合っている。

自分用のスーツくらいなら用意できるからこそ、疑問を感じずにはいられないスペインだったが、深く考えるのも面倒で、早々に考える事を放棄してしまつた。

「まあ、王王か〜」

そんなスペインの投げやりな呟きを他所に、プロイセンは仲

間に入れてもらえている事だけでも「機嫌だった。」
ポケットからサングラスを取り出したプロイセンが、意気
揚々と装着している様子を眺めていると、ホントにどこかの
マフィアの下っ端にいそうだと、思い浮かべたスペインとフラン
スだったが、敢えて口にする事もなかった。